

[論 文]

# 御主イエスの御誕生と成長について潜伏キリシタンは 如何に語り伝えてきたか

——『天地始之事』における聖書物語の受け止め

梶 田 叡 一  
Eiichi KAJITA

The Birth and Growth of JESUS —The Examination on the Passed Down Story of  
Underground Cristians' Document ; “Tench Hajimari no Koto”

長崎や五島列島の潜伏キリシタンは、幕末の「信徒再発見」の時期まで、『天地始之事』と称する長編の物語を密かに伝承してきた<sup>1)</sup>。その内容について、『天地始之事』の基盤となった旧・新約聖書の物語やキリシタン宣教師の教えが、厳しい禁教下で世代を重ねた長年月の潜伏生活の中でどのように変容していったか、そこに日本在来の思想的土壌の影響はどのような形で認められるのか、さらには、その基盤となっている日本人の伝統的な心性についてどのように捉えたらいいのかについて、引き続き考えてみることにしたい<sup>2)</sup>。

長崎・五島地方の潜伏キリシタンは、集落ごとに小さな共同体を作って、独自の暦に基づく生活習慣を持ち、周辺の誰にも分からぬオラショ（祈り）の言葉を心に唱え、時に独特の祭儀を秘密裏に行っていた。当然の事ながら、その具体的内容については共同体の外部に対して隠されており、様々な偽装をする形で周辺と付き合う、という生活を続けていた。まさに典型的な蛸壺型共同体である。こうした共同体の日々の生活を支え、独自の習

---

キーワード：潜伏キリシタン，キリスト教の日本的受容，イエスの誕生と成長，天地始之事，新約聖書

慣や儀礼を最も基盤において支えているのは、メンバーが共有する固有の物語世界にはかならない。こうした物語世界は必ずしも体系的にまとまっていない場合もあるが、大事な要素だけはきちんと共有していないと独自の習慣や儀礼等を堅持し持続させていくことは不可能である。『天地始之事』は、閉鎖的な蛸壺型共同体として存在した長崎・五島地方の潜伏キリシタンが堅持していた、珍しくも体系的に組み立てられた物語世界であり、その意味で非常に貴重なものと言っている。この物語を詳細に検討したいと考えるのは、当時の潜伏キリシタンの日常生活を支え続けていた精神世界がここから伺えるであろう、という期待があるからである。

もちろん、当時の潜伏キリシタンの共同体の外部には、神社の祭礼に集い浄土真宗等の公認寺院の檀家として生活する他の大きな共同体が存在していたわけである。こうした共同体もまた基本的には蛸壺型であり、固有の物語世界をその基盤に持っていることはあらためて言うまでもない。もちろん、潜伏キリシタンの潜む蛸壺の低部には、そうした他の共同体の蛸壺にも通じる管が幾つもあったことが十分に想定される。こうした事情のため潜伏キリシタンの持つ物語世界にも他の共同体から流入した数々の要素が入り込み、時には大事な要素としての位置を占めるものとなっていることも予想されないではない。こうした点についても、我々は十分な関心を持って見ていかななくてはならないであろう。

さて、ここで検討するのは、「御主イエスの御誕生と御成長」の物語である。これは、『天地始之事』を構成する6つの大物語の第3として語られている。第1の大物語で天地創造が語られたのに続き、いよいよ本論に入って第2の大物語として御母マルヤ（＝聖母 マリア）のことが語られたのに続けての物語である。そして、ここでの内容は、続いて第4の大物語「御主イエスの御受難と勝利」として展開され、御主イエスの生涯のクライマックスが語られることになるわけである。

「御主イエスの御誕生と御成長」は、具体的には、次の4つの物語からなる。

- (7) 御誕生後の御主の様子と逃避行の次第。
- (8) 御主の受洗と学問の物語。
- (9) 御主がガクジュランの所で仏法を論破し弟子ができる物語。
- (10) 帝王ヨロウテツが御主を殺そうとして数万の幼子を殺す物語。

イエスについてのこうした物語は、新約聖書に述べられているところに主たる根拠を持つ。ただし、イエスの誕生と成長について語っているのは『マタイ福音書』と『ルカ福音書』であり、『マルコ福音書』や『ヨハネ福音書』には語られていない。また『使徒言行録』にも、『ローマの信徒への手紙』等といった使徒達の手紙類にも、さらには『ヨハネの黙示録』にも語られていない。なお、詳しくは後述するが、イエスが仏法を論破し弟子ができた（物語9）等といった幾つかのエピソードは『天地始之事』独自のものである。

キリシタンが当時の宣教師達から聞かされていたイエスの物語は、何よりもまずイエスの直弟子たちの時代から連綿として伝えられてきた神話的なものであり、当時の西欧カトリック世界で広く共有されていた信仰そのものと言ってよい。したがって、ここでの吟味検討は、新約聖書に述べられているところとの比較を中心としながらも、潜伏キリシタンの伝承には当時の南欧のカトリック信仰の在り方が、当然のこととして色濃く反映されていることを念頭に行うことになる。

#### 【物語7 御誕生後の御主の様子と逃避行の次第】

イエス物語の最初は、母マルヤの下でイエスが幼児期をどのように送られたかである。興味深いエピソードが幾つか紹介される。また帝王ヨロウテツがイエスが成長してから自分の身分を奪うのではと恐れ、捉えて殺そうとする動きを見せる中で逃避行を続ける模様も語られる。こうした物語は次の7つの小物語（エピソード）から構成されている。なお小物語の冒頭の数字は『天地始之事』全体を構成する小物語の通し番号である。また途中の何か所かで挿入された（ ）内の語句は、筆者による説明的なものである。

(27) イエスご誕生の3日目に、母マルヤは家主の女房にお湯を所望される。そして、その湯をその息子にも浴びさせたら、と言うが、家主の女房は自分の息子はできものができて痛み、命にもかかわるほどだからといったん断る。しかし、是非にもとその湯を掛けると、たちまちできものは治り、息子の命の危険も去った。

←こうしたエピソードは新約聖書のどこにも見られない。またヨーロッパのイエス伝承やマリア伝承にも見られないものである。誕生間もない頃から神異的で特別な存在だったという事を強調したいがためのエピソード創作であろう。ただし、ルカ福音書が同様の神異性を強調するために述べているエピソード、イエスの誕生を天使達が羊飼達に告げ、

彼らがイエスを見に来た、といった話は、『天地始之事』では触れられていない。

(28) 8日目に、浮き世の恋や無情のことを考え、未練の心も出てきたので、シロクシサン（割礼）を受けさせられたが、御血を流されたので、母マルヤは驚き、すがりついて泣きたもうた。

←誕生8日目に、ユダヤ民族の伝統に従ってイエスが割礼を受けられたことがルカ福音書に述べられている。しかし『天地始之事』では、浮き世を捨てる儀礼のような意味付けで割礼のことが理解されており、ユダヤ的な割礼の意義は伝えられていない。ただ出血があったことが述べられているので、どのような内容の措置であったかは宣教師からの伝承があったように推測される。母マルヤが驚き、泣いた、というのは『天地始之事』独自のエピソードである。

(29) イエス誕生後しばらくして、ツルコの帝王メンテウとメシコの帝王ガスバルとフランコの帝王パウトザルの3人それぞれにお告げがあり、それぞれ別の道を通って出発したが途中で一緒になり、連れだって、導きの星を目当てにベレンの国に到着した。

←マタイ福音書には、3人の占星術の学者達が不思議な星の出現に導かれて幼子イエスのもとを訪れる、という話が出ている。『天地始之事』では3つの国の帝王が星に導かれて、ということになっているが、今でもクリスマスの頃に子供達が演ずる聖劇では学者でなく王様となっていることが多く、キリシタンが宣教師から聞いて理解したのは学者でなく帝王ということだったのかもしれない。

(30) 3人の帝王はベレンの国の帝王ヨロウテツのもとを訪れ、「この国に天から御主が誕生になった」と告げ「一緒に拝みに行こう」と誘うが、ヨロウテツは「自分は行かないが、貴方達は行ってきて下さい」と断る。3人の帝王はまた導きの星によって御主のもとにたどり着き、礼拝をした。13日目のことであった。

←マタイ福音書でも、3人の占星術の学者はまずユダヤ国の王であるヘロデのところを訪ねる、となっている。そして3人に「先に行って礼拝してくれ、後で自分も行くから」とヘロデ王が言ったことになっている。ほぼ同趣旨と言ってよい。ただし、マタイ福音書では、占星術の学者達は、幼子を礼拝する際に持参した宝箱を開け、黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げた、とされており、より一層入念である。

(31) 御主は3人の帝王達に「どこからお出でになったか」と尋ねると、「導きの星によって知らぬ間にここに来てしまいました」と答える。御主は「貴方達の来た道は悪人の道で今は消えてしまったので、これから道を創って帰れるようにしてあげましょう」と言われる。帝王達がはっとひれ伏して待っていると、間もなく天の釣り橋が3本かかり、3人はそれぞれの道を通って帰っていった。

←マタイ福音書でも、3人の占星術の学者は、「ヘロデのところ立ち寄りな」という夢告を受け、帰りは別の道で帰った、と述べられている。

(32) ベレンの帝王ヨロウテツは、ポンショとピロウトという2人の家老を呼んで、「我が国に天から御主が生まれ来たということだが、このままにしておいたら国を取られてしまい、自分もお前たちも流浪の身になってしまう」と告げる。そして「今は未だ誕生後14日、15日という幼子らしい」と言う。これを聞いた2人の家老は、「私たちが行って殺してきます」と出ていくが、道が分からず、野山や川を越えて村々家々を探しまわった。

←『マタイ福音書』には、ユダヤの国王ヘロデが将来自分の地位を脅かすかもしれない幼児が誕生したということでベツレヘムとその周辺一帯の2歳以下の男子を一人残らず殺させた、との記述がある。ただし、2人の家老に指示して、といった記述はない。ちなみにここでの家老名が ポンショとピラトになっているのは、後にイエスを死刑に処す決定を行ったローマ総督ポンショ・ピラトの名前が流用されたものであろう。

(33) 帝王の配下の者達に追われていることを知った御主とマルヤは逃げ出したが、途中で麦を植えている農民達に会い、追手が来たら「この麦の種を蒔いた頃に通った」と言ってほしいと頼むが、農民達は笑って取り合わなかった。この麦は実らなかったという。そこを過ぎてまた麦作りの農民達にあったので前と同様に頼むと、請け合ってくれた。追手の者達がやってきて、その農民達に「2人が通らなかったか」と問うと、農民達は「この麦を蒔いた頃に通っていった」と答える。その麦はもう実って色づいていたので、追手の者達は、がっかりしてそのまま引き返していった。

←こうした話は新約聖書には見られない。イエスを特別な存在とするための神秘的奇跡的なエピソードとしてここに挿入したものであろう。

## 【物語8 御主が受洗され学問される】

御主イエスは逃げ延びられて、サンジュアン（＝洗者ヨハネ）にお会いになり、洗礼を受けられる。その後、デウス（天帝）に呼ばれて天に上がり、皆が敬うべく冠を頂いて下界に戻られた。そして出家されて森の中の御堂に入られた、という物語である。これは『天地始之事』独自の物語であり、次の3つの小物語（エピソード）から構成される。

(34) 御主とマルヤはようようのことで逃げ延びられ、パウチスモという大川の畔に着かれた。そこでサンジュアン（＝洗者ヨハネ）にお会いになる。サンジュアンは、自分は御主に御水（洗礼）を授けるために7ヶ月先に生まれたものです、と自己紹介する。御主は喜ばれ、その川の中で洗礼を受けられる。この時から御主をジュスーキリヒトと敬うことになった。この川の水はきれいな名水で、悪人の後生の救いのために流れが割れるようにと御主が思われると4万余すじに別れ、その水を授かったものは皆パライソの快樂に入れることになった。そしてタボロというところに御着きになった。40日目のことであった。

←こうした話は、そのままの形のものとしては新約聖書に見られない。しかし、洗者ヨハネに洗礼を受けた、ということがイエスの社会的活動（公生活）の原点になっていることが福音書に語られているわけであるから、御主の洗礼のエピソードがここに置かれていること自体は、宣教師の教えたところから考えても妥当と言ってよいであろう。

(35) デウス（天帝）は下界に降りた御主を召し寄せたいと思われたので、御主は天に上がられ、デウス（天帝）と御面談になった。そしてデウス（天帝）は御主が皆に敬われるようにと冠を授けられたので、それをおし頂いて下界に戻られ元のタボロに御着きになった。ここで出家され、ゼゼマルヤの森の中にある御堂に入られた。これは50日目のことであった。

←こうした話は、新約聖書のどこにも見られない。一度下界に降りたイエスが天上界に呼ばれて天帝と面談するとか、そこで冠を授けられるとか、下界に帰って出家し、森の中の御堂に入られるとか、すべて『天地始之事』独自の物語である。御主イエスの権威づけのためであろう。幼少時に出家して学問の道に入られたと述べることで、イエスの学問的宗教的な人生の純粹さを強調したかったのではないだろうか。

(36) 御主はすぐに学問を始められたが、サガラメントが天下って7日7夜の御指導があり、御上達されて天に昇られた。御主は12歳まで学問一筋に暮らされたが、この間、御母マルヤは蜘蛛の巣を取って天つ衣を織られ、御主のお召し替えに用いられた。

←こうした話は、新約聖書のどこにも見られない。福音書によるとイエスは少年の頃から利発であったとルカ福音書に伝えられているが、イエスを指導するために天上界から何者かが来訪する、などという話はない。また聖母マリアについても、こうした日本の昔話に見られるような設定でイエスのお世話をされた、といった話は新約聖書のどこにも見られない。

### 【物語9 御主がガクジュランの所で仏法を論破し、弟子ができる】

ガクジュランという学者のことを耳にされた御主イエスは、この人の下で学問をしようと balan 堂に行かれた。そしてガクジュランと「南無阿弥陀仏の6字妙号の功德」や、私語の行く先のことで問答される。ガクジュランは終には答に詰まると、説法台の席をイエスに譲る。そこでイエスが、デウス（天帝）のこと、パライソのこと、人間万物の創造のことを説かれる。これを聞いてガクジュランの弟子たちがイエスに弟子入りを願ったので洗礼を授けて弟子とされた。この時そこにいた群衆も洗礼を受け、御主に仕えた。ガクジュランもまた洗礼を受け、弟子となった。そして御主イエスは12人の弟子を連れてロウマの国に赴かれ、そしてそこに金銀の輝きもまぶしいお寺を建てられた、という。これはまさに『天地始之事』独自の物語であって、ローマを中心としたキリシタンの世界教会がイエスによって如何に開創されたかを語るものである。この物語は次の6つの小物語(エピソード)から構成されている。

(37) balan 堂という所にガクジュランという学者が居り、よく学問をし、一切経にも通じているとのことを耳にされたので、御主はこの人の下で学問をしようと行かれた。御母マルヤは御主がどこに行かれたのかと3日3晩捜され、balan 堂でお会いになることができた。

←こうした話は新約聖書には一切見られない。御主が師とされようとした人が一切経に通じた学者ということになると、キリシタンの教えも仏法も学問としては同じようなものであると潜伏キリシタン達は認識していたということになるのであろうか。この点は次の

エピソードについても同様である。なお、御母マルヤが御主を捜されたという話や、次のエピソードで語られるガクジュランと御主との問答は、ルカ福音書がイエス12歳の時のエピソードとして語るところ、すなわち、過越祭にエルサレムへ両親に連れられて上京したが帰路にイエスが見当たらないことに両親が気付く神殿まで引き返して捜し回り、境内で学者達の真ん中に座って話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた、との話を連想させられるものである。

(38) ガクジュランは説法して、「なむあみだぶ（南無阿弥陀仏）の6字の妙号を唱えれば極楽に成仏することは疑いない」と説く。御主は「その妙号を唱えて、死んでいく先はどのようなところなのか」とお尋ねになる。ガクジュランは「死後のことは十分に明らかではないが、弘誓（四弘誓願）の船に乗れば、悪は地獄に落ち、善は極楽に行くことは疑いのないところ」と言う。御主は「その極楽はどこにあるのか」と尋ねられると、またガクジュランは「弘誓（四弘誓願）の船に乗りさえすれば、極楽世界に行くことは疑いのないところである」と言う。御主は「疑いのないところ、と言うだけでは分からないではないか。それなら天地日月人間万物はどのようにして出来たか、ぜひ聞かせてほしい」とおっしゃると、ガクジュランは「若いくせに偉そうな口をきく。それならお前は知っているのか」と言う。御主が「それなら語って聞かそうか」とおっしゃると、ガクジュランは椅子から下りて、御主に椅子に上がるよう促す。

←こうした話も新約聖書には一切見られない。しかし、先に述べたイエスが12歳の折に神殿の境内で学者達と議論していた、という話を思い起こさせるものである。ルカ福音書(2-47)では、「聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた」とも記されている。ちなみに「なむあみだぶ（南無阿弥陀仏）」と唱えて成仏を図るという信心は、法然や親鸞に始まる浄土宗や浄土真宗のものであり、潜伏キリシタンの居住していた長崎近辺や五島列島にそうした宗徒が多ったことを物語るものであろう。また「弘誓（四弘誓願）」とは、成仏を求めて修業する人（＝菩薩）の基本的な誓願（＝願望・決意）であり、「衆生無辺 誓願度・煩惱無量誓願断・法門無尽誓願知・仏道無上誓願成」である。こうした決意を持って生活していけば、ということをして「弘誓の船に乗る」と言ったのであろうが、この場合どこまで現実的な背景を持つ言葉なのか、単なる説法上の慣用句なのか、不明である。

(39) 御主は次のように説かれた。天の高さ地の深さは8万余丈、仏と拝むべきは天の御主であるデウス（天帝）であり、この方こそが人間の後世の助かりをなさしめたもう仏である。この仏が天地日月を創り、パライツという極楽を創られ、人間万物、ありとあらゆるものを思し召すままにお創りになった。人間をお創りの折には自分の息を入れられたのであるが、大きな溜め息をつかれたために悪風となり、島に風が集まって大風となり、被害をもたらす。草木を吹き枯らし、人間の種も絶えようとする時に、天から仏が止め給うが、これが世の終りの75里の吹き枯らしである。

←こうした話も新約聖書にはないが、ここでデウス（天帝）を人間の後世の助かりをなさしめてくれる存在であると言っているのは、潜伏キリシタンの信仰の根底にあるものを示しており、重要である。またデウス（天帝）による天地創造の物語は、基本的には旧約聖書の創世記に依るものと考えてよい。しかしながら、そうしたデウス（天帝）を仏と呼んでいるのは、キリシタン信仰の土着化による変容をうかがわせるものとして興味深い点と言ってよい。最後につけ加えられている暴風による自然災害とデウス（天帝）との関わりについての話は、長崎や五島列島で生活していく上で大事な気象問題から創られた説話であろうが、当然のことながら旧訳聖書や新約聖書とは何の関係もない。

(40) これを聞いてガクジュランの門弟12人が、御主に弟子入りを願う。御主はその願いを受け入れて、12人に洗礼を受け、弟子とされた。この時にそのお寺に参っていた群衆の人々は我も我もと洗礼を受け、御主に仕えた。

←こうした話も新約聖書には一切見られない。新約聖書では、生前のイエスにこれほど順調かつストレートな形で弟子ができていくことは語られていない。こうした物語は潜伏キリシタンの純朴なイエス信仰の現れと言えるであろう。

(41) この様子を見たガクジュランも、自分も弟子になりたいと言う。そこで一切経を捨てた方がいいかどうか論争が起こるが、御主が自分の持っている1冊と一切経数冊とどちらが重いかによって大事さを検証しようと言われ、重さを量ると一切経の方が軽かった。それを見たガクジュランは、言い争いの余地はないとして洗礼を受けてほしいと望んだ。

←こうした話も新約聖書には一切見られない。イエスが一度は師匠にしようと考えたほどの学者でもイエスの弟子になった、ということで御主イエスの偉大さを強調するものであろう。

(42) ガクジュランは「今は帝王ヨロウテツの御主に対する追及が強いので、この寺も書物もこのままにしておいたままで私に洗礼を授けてください」と言うので、御主はそれを聞き入れ、洗礼をお授けになった。そして、12人の弟子と一緒に出発された。ロウマの国にお着きになり、金銀がちりばめられて輝くサンタエキリンジャの寺を建てた。この寺で人間の後生のたすけを広めておられるとのことである。

←こうした話も新約聖書にはない。しかし、12人の弟子をつれてローマに行かれ、そこに大きな寺を建てて、そこから人間の後生の救いを広めておられる、という話は当時のキリシタンの世界観の現れとして興味深い。宣教師からローマには大きな教会があり、そこに御主の跡継ぎであるパパ様（教皇）が居られて、世界中のキリシタンのために活動しておられる、といった話を繰り返し聞いてきたことであろう。このエピソードは、そうした世界観の反映と見てよいのではないだろうか。

#### 【物語10 帝王ヨロウテツが御主を殺そうとして数万の幼子を殺す】

話は一転して、御主が成長されていけば自分を排除して王位に就くだろうとして、帝王ヨロウテツが御主が幼子の間に抹殺しようとして、数万にも及ぶ幼子を皆殺しにする、ということが語られる。『天地始之事』では、イエスの十字架上の死を、新約聖書的（パウロ教的）に「人祖の罪（原罪）」の償いとするのではなく、この「幼子の大量殺害」の償いとしている。したがって、この物語は新約聖書での1挿話の扱いとは違って、重い意味を持っている。これは次の2つの小物語（エピソード）から構成されている。

(43) 帝王ヨロウテツは御主を捜し廻ったが見付からないので、在地の子供達の中に紛れ込んでいるに違いないと、生まれたばかりの乳児から7歳までの国中の子供を殺してしまえ、という命令を出した。このため4万4千4百4十4人の子供が皆殺しにされた。御主はこのことを伝え聞かれ、数万の命が失われたのは自分のためであると、後生のたすけのためゼゼマルヤの森の中で苦行をされた。

←マタイ福音書には、ヘロデ王が命じて、ベツレヘムとその周辺一帯の2歳以下の男子を一人残さず殺した、とある（2-16）。ただし他の3福音書等にも新約聖書の他の箇所にも、そうした記述は無い。またイエスが、幼子たちの死を悼んで、その後生のたすけのために苦行する、などという話は新約聖書のどこにもない。ただ『天地始之事』では大勢

の幼子の死を自分自身に関係することとして御主がその子らの後生のために苦行する、ということになっているのは、後で語られる御主の十字架上の死の基本的意味付けをしていく上での伏線として、重要な意味を持つ。

(44) デウス（天帝）から、「数万の幼子の命が奪われたのは皆その方のためである。このようなことが生じれば、パライスの楽しみを再び得ることは困難になる。だからその方は、亡くなった子供の後生のため、責め虐げられ、命を苦しめて、身を捨てなくてはならない」というお告げがあった。御主は、はっと平伏され、血の汗を流された。昼5ヶ条のオラシヨ（ロザリオの受難の玄義）はこの時に始まる。御主はローマの国のサンタ・エキレンジャの寺にお帰りになり、何とかして悪人に苦しめられ、命を捨てなくては、と思われた。

←この部分も、引き続いて、イエスの十字架上の死に対する『天地始之事』独自の意義づけを語ろうとしており、新訳聖書には見られないストーリーである。

#### 【新約聖書の伝えるイエス像との主要な異同点が示唆するところ】

ここで見てきた部分で、新約聖書の伝えてきたイエス像と最も大きく異なるのは、イエスの受難と十字架上の死の意味付けである。潜伏キリシタンたちは、幼子イエスを抹殺しようとして帝王ヨロウテツが数万の幼子を殺したことの贖罪として、という意味付けをしているが、新約聖書では、さらにいえばカトリック教会の伝統的な考え方では、人々の罪の償いとして、という意味付けがされてきている。人祖アダムが神の命に反したために生じた人々の原罪を、神の子であるイエスが生贄の子羊として自らの身を捧げることによって償い、人々を解放し自由にしたのだ、ということである。

例えば使徒パウロは「ローマの信徒への手紙」の中で次のように述べる（3-23～25）。

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる購いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。

新約聖書の方は、イエスの受難と死を人類全体の救いのため、といった壮大なビジョンの中で意味づけているのに対し、『天地始之事』では、数多くの幼子の後生のたすけのため、

という形でとらえ、具体的で理解しやすい意味づけにしているが、極めて矮小化して捉えている、と言っていいであろう。

もう一つ『天地始之事』の物語世界が新約聖書の内容と大きく異なるのは、イエスの学問の内容である。新約聖書が伝えるのは、イエスが学んだのは当時の熱心なユダヤ人の家庭で広く行われていた旧約聖書についての学びであるのに対し、『天地始之事』では伝典とされている点である。『天地始之事』には旧約聖書については「創世記」の一部以外に触れられていないことからかんがえても、当時の潜伏キリシタンは旧約聖書の大事な部分については何も知らないままであった、ということを示すものであろう。さらに言えば、当時ので潜伏キリシタンは、キリシタンの依って立つところと伝教の依って立つところが思想的に大きく異なっていることについて知らないだけでなく、そうした点について何らの問題意識も持っていなかった、ということなのであろう。潜伏キリシタンと他の宗旨の人たちの意識の違いは、何を拝むか、どういう儀礼を大事にするか、といった辺りにしかなかった、ということなのかもしれない。

#### 後注

- 1) 梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』」奈良学園大学紀要 第3集, 2015年9月, 29~37.  
梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』(その2)」奈良学園大学紀要 第6集, 2017年3月, 15~21.
- 2) 梶田叡一「旧約聖書『創世記』の物語の日本での受容——潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』における聖書物語の受け止め(1)」プール学院大学研究紀要 第58号, 2018年1月, 1~12.

#### 参考文献

- 遠藤周作『切支丹時代—殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー、1992年。  
紙谷威広『キリシタンの神話的世界』東京堂出版、1986年。  
田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、1954年。